2018.08.02

# スポーツ界の不祥事から

小嶋祥三

レスリング界のコーチと選手の関係、日大監督によるアメリカンフットボールの危険タックルの指示でドタバタしていたが、今回は日本ボクシング連盟 JABF で問題が起きている。いずれも、権力を持つものが、自分の力を維持するために選手や組織をコントロールする、という側面があるようだ。体育会系のタテ社会がそれを助長しているのだろうか。今回の JABF について報道されていることがすべて事実か分からないが、山根会長は昔の殿様のように振舞い、何とも前近代的な感じである。五輪の金メダリストでプロに転向した村田諒太選手が「悪しき古き人間達」と批判したが、もっともだ。公の組織にまだこんな人がいるのかと驚く。とにかく、醜く恥ずかしい。

山根 JABF 会長と日大の田中理事長のツーショット写真がネットで出回っている。日大の問題も結論が出てきた。7 月 30 日にこの問題に関する日大の第三者委員会の最終報告が出て、田中理事長の説明責任を認定した。同じ日に日大理事会はアメリカンフットボール部の内田前監督と井上前コーチを懲戒解雇した。7 月 31 日に日大が提出した改善報告書を検討してきた関東学生アメリカンフットボール連盟は、日大の公式試合出場資格停止処分を解除しないことを決定し、発表した。これで日大の 4 年生は試合に出られないことになった。さぞ残念だっただろう。関東学連も第三者委員会と同様に、日大の理事長や執行部の体質に疑問を持っている。以前、この問題を述べたとき、日大は何を守ろうとしているのか？と書いた。結局、多くの人がフットボール部だけの問題でなく、日大の運営体制の問題ということになってきたようだ。日大が守ろうとしているのは、これなのだろう。

アカデミックな世界もこのような問題と無縁ではない。以前述べたブラック・ラボはその例だし、パワハラ、アカハラもその例だ。学者の中には権力欲、名誉欲の持ち主がいても別におかしくない。そういう者は学生を含む若い研究者に自分の考えを押し付け、コントロールしようとする傾向がある。それに刃向かえば恫喝され、若手は様々な不利益を被ることになる。そのようなことが度重なれば、若手は上の顔色をうかがい、上の意向に沿うようになる。ホネのある若手研究者はその教室を離れることになる。わたしは若手が元気な教室は発展すると思うが、下が上を忖度するようになったらオワリだ。上も努力していろいろと着飾るだろう。外から見ると華やかに見えるかもしれないが、いずれ地金がでてしまう。

「自由な学風」を標榜する京都大学に、まさかこのような先生はいないだろうけれど。